

障害児の運動遊びを促進するための指導

幼児教育選修 不破未由希

1. 研究の目的

幼稚園や保育所では、運動遊び、造形遊び、ごっこ遊び、表現遊びなどといった様々な遊びを通して、子どもたちの全体的な発達が目指されている。今日では、車を利用する機会の増加やテレビを見たりゲームをしたりして室内で過ごす時間の増加により、幼児が体を動かす機会が減少してきているため、幼稚園や保育所で十分に体を動かすことの重要性やニーズが一段と高まっている。そのような状況を踏まえ、筆者は多くの遊びの中から特に運動遊びに着目しようと考えた。また、体を動かすことは、健常児にとってはもちろんのこと、障害児にとっても大変重要であるため、在園する障害児が、日々の保育の中で、積極的に運動遊びに取り組むことが必要である。しかし、保育者は障害児保育において、障害児の問題行動等に対して多くの困難さを抱えている。特に、統合保育が広がりを見せていることもあり、様々な子どもたちがいるからこそ、健常児と障害児を同時に保育することに困難さを感じているのではないだろうか。そこで、本研究では障害児の運動遊びの現状を調査するとともに、障害児の運動遊びの困難さや、その困難にどのように対応しているか、また、どのような思いで障害児の運動遊びに取り組んでいるのかということをもとめたいと考えた。

2. 調査の概要

(1) 調査の方法

愛知県内のA市、B市、C市の幼稚園、保育所の現役保育者を含む保育職経験者4名に、障害の診断を受けた子どもの運動遊びについて30分～1時間のインタビューを行った。インタビューでは、①担当した障害児との運動遊びにおいて困ったことは何か、また、②それに対してどのように対応したかを自由に語ってもらった。その際、現在統合保育が広まりつつあること、また、統合保育におけるいくつかの困難さを保育者が強く感じているのではないかと考え、インタビューで語ってもらう内容は、統合保育であることを条件とした。さらに、障害の種類によって保育者の対応が変わってくると考え、障害の診断のついた子どもに条件を絞った。

(2) 対象者の概要

対象者である保育者A～Dの受けもった障害児の「障害名」「年齢」「性別」は以下の通りである。な

お、保育者Cには2人の障害児についてインタビューを行ったため、それぞれ保育者C1、C2、対象児c1、c2で表した。

表1 対象者の担当児の概要

対象保育者	対象児	対象児の障害名	年齢	性別
保育者A	対象児a	アスペルガー症候群	5歳	男
保育者B	対象児b	高機能自閉症	5歳	男
保育者C1	対象児c1	アスペルガー症候群	5歳	女
保育者C2	対象児c2	高機能自閉症	5歳	女
保育者D	対象児d	自閉症	5歳	男

(3) 分析手順

試案として、データの分析では、録音した音声データをテキスト化し、そこから注目すべき語句を抽出し、言葉の言い換えを行った上でその語句を説明するような概念を作成した。概念作成の際には、障害児の運動遊びに対する困難さや、それに対する対応だと思われる部分を抽出し、作成するようにした。また、運動遊び以外の活動についての語りも、運動遊びとの関連性が強いと考えられる場合には取り上げた。以下はテキストの分析の一例である。

表2 テキストの分析の一例

テキスト	注目すべき語句	語句の言い換え	語句を説明するような概念
その子はアスペルガーってというのが入園前にお母さんが診断受けて。支援センターに行ってみて。ちょっと育てにくいって言うのがあったんだろうね	アスペルガーってというのが入園前にお母さんが診断受けて 育てにくいって言うのがあったんだろうね	入園前に障害についての情報を得る	事前の情報収集

ね。で、センターに通って、そこでまあ、勧められたのかで、診断も受けてからの入園だったかな。はい。	勧められたのかで、診断も受けてからの入園だった		
(中略)			
だから動くのは大好きなのね。だから外遊びとかは大好きで。	動くのは大好き外遊びとかは大好き	運動が好き外遊びが好き	運動遊びへの前向きな気持ち運動を好む

テキストの分析後、作成した概念をそれぞれ分析ワークシートにテキストとともに示し、定義、分析を行った。また、作成した概念を包括するカテゴリを作成した。分析シートには、「概念名」「定義」「バリエーション」「メモ」の欄を作成した。以下は分析ワークシートの一例である。

表3 分析ワークシートの一例

概念名28	他の先生との協力・連携
定義	加配の先生や園の外部の先生と連携や協力したり、対象児の様子を伝えたりすること。
バリエーション	<p>【加配の先生との保育方針の相談・共有】</p> <p>(E) やっぱり加配の先生がついてるから、その先生と一緒に、その子がみんなでどうやったら楽しく遊べるかなとか、こういうところにつまづいたときにその先生と一緒にこう、気持ちを共感するんだけどでもさ、みたいところを伝えるとか、そういうことがやっぱりなんか、大事かなど。</p> <p>【外部の先生との連携】</p> <p>(B) でもプール遊びとか、プールとか体操とかの教室にも習いに行ってた子で、でもなかなか、幼稚園じゃない場所でのそういうことが、そういう環境に行くっていうことが難しくて。(中略)なので、気持ちが落ち着いてる時に話をするとか、そういうのは基本というか、ベース</p>

	<u>にあるなっていうのはすごく感じてて、プールの先生とかともよく打ち合わせを。</u> 他C
メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・加配の先生と協力して保育を進めることが統合保育では大変重要である。 ・園外の教師には、対象児の普段の様子を担当の先生がしっかりと伝えることで、園外の活動で対象児がよりよく過ごすことができる。

その後、概念を整理し、概念を包括するカテゴリを作成した。

3. 結果と考察

作成した概念、カテゴリ、コアカテゴリは以下の表のとおりである。

表4 カテゴリ及び概念一覧

【コアカテゴリ】	『カテゴリ』	〈概念〉	対象者
対象児にかかわる運動の障壁	体の使いの悪さ	体の使いの悪さ	ABC1
	運動に対する気持ち・運動能力	運動が好き・運動ができる	ABC1 E
		運動に対する後ろ向きな気持ち	ABC1 C2
	特別な配慮を要する特性	プライドの高さ	AB
		自傷行為 危険を伴う	BE C1E
	目標・目的を共有することの難しさ	目標・目的を共有することの難しさ	A C1
	ルールを受け入れられない	ルールを受け入れられない	A E
保育者の葛藤・悩み	障害児保育の困難さ	ギャップに対する葛藤	AC1 C2 E
		言葉や絵で伝わらない	A C1
	無理にやらせるべきなのかという葛藤	無理にやらせるべきなのかという葛藤	C1 C2 E

障壁に対する対応	対象児に合わせた対応	個別の対応・特別な配慮	AB E
		特性に合わせた保育の工夫	AB C1
	何が障壁になっているのかを探る	何が障壁になっているのかを探る	AB
	対象児との関係づくり	対象児との関係づくり	A E
	入園前の情報収集	入園前の情報収集	A C1 C2 E
自立への意識	自立への意識	様々な経験を積み重ねる	BC1
		経験が他の場面に繋がる	AB E
		将来を見据えた保育	AB C1 E
他児とのかかわりに関すること	他児からの不満	他児からの不満	A C1 E
	他児の支え	他児の支え	AB C1 C2 E
	健常児と障害児のお互いの気持ちを伝える	健常児と障害児のお互いの気持ちを伝える	E
保護者に関すること	保護者から保育者への要望	保護者から保育者への要望	C1 C2
	家庭での運動への取り組み	家庭での運動への取り組み	A C1
	保育者から保護者への働きかけ	保育者から保護者への働きかけ	AC1 C2
他の先生との協力・連携	他の先生との協力・連携	他の先生との協力・連携	BC1 E

(1) 対象児自身にかかわる運動遊びの障壁

対象児の体の使いの悪さは、運動遊びに取り組む際、保育者にとって気になる特徴のように考えられる。特に、統合保育の中で健常児に比べて体の使いの不器用さが目立つ場合や、障害児が動きを習得する際の直接的な障壁になる場合は、この特徴がより気になる傾向が見られる。

障害児が運動を好むかどうかは、家庭環境や運動遊びの経験、障害の特性などが大きくかかわってくるため一概には言えないが、体を動かすことを好まない障害児がいること、また、運動全般が好きでも、特定の運動が苦手でパニックになる可能性があることが考えられる。今回の調査では多くの障害児が日々の保育の中で運動遊びを楽しんでいる様子が見られた一方で、積極的に運動に取り組むため、その分困難に直面する一面も見られた。

5歳の保育では、共通した目標のために他児と力を合わせることが目指されるが、保育者は、障害児にそれを求めることに困難さを感じていると考えられる。また、保育者は、ルールのある運動遊びを障害児が取り組むことに関して難しさを感じていると思われる。

(2) 保育者の葛藤・悩み

障害児は、実際の年齢よりもゆっくりではあるが、一歩ずつ発達していく。そのため、その年齢での望ましい姿と実際の姿との差に直面する機会が多く、保育者はその度に困惑したり悩んだりしていると思われる。

統合保育の中で、健常児の思いと対象児の思いの差に直面する場面があり、そこで保育者の葛藤が見られる。対象児にとって楽しくないことを周りに合わせて強要してしまっていることに対して悩んでいる様子が伺え、対象児の気持ちを尊重したいという気持ちと、他児の思いも受け入れていかなければという気持ちとの葛藤が日々の保育で行われていると考えられる。

上手いかない運動に対して、日々繰り返し練習すればできるようになるかもしれないという思いと、一生懸命頑張る対象児の姿を一番に大切にしたいという思いとの葛藤が生まれているが、保育者の中には、強制せず、その子の楽しんでいる範囲でやらせてあげたいという思いがある。

障害児にとって苦手な遊びを友達がしている時には、嫌いな遊びをするよりも好きな遊びを一人ですることを選ぶ場合があり、友達と少し距離ができてしまう。本人の気持ちを考えると、そこまで無理に友達と遊ばせる必要はないのかもしれないが、友達と遊ぶ楽しさを伝えた方がいいのではないかと、いつも仲良しの友達と別々で遊んでいる光景は心が痛むといった葛藤を保育者は感じているようである。

(3) 障壁に対する対応

保育者は、障害児それぞれの特性を理解した上で、障害児にとってどのような伝え方をすればわかりやすいのかといった伝え方の工夫をしながら、よりよい援助に努めようとしている。また、苦手な運動遊

びも、保育者が個別にかかわったり、特別な配慮をしたりすることでできるようになるという様子も見られた。個別に障害児とゆったりと対応する時間をつくることで、障害児のできることが増えたり、パニックを少しでも抑えながら生活できるようになったりすると思われる。また、障害児が運動遊びに取り組む際、表情や発言から読み取ったり、直接聞いたりすることを通して、どのようなことが障壁になっているのかを探り、対応に生かそうとする保育者の姿が見られた。

運動遊びを含めた様々な遊びに取り組むためには、まずは基本的な生活習慣を確立し、保育者との信頼関係をつくり、園で安心して生活していけるような状態を目指す必要がある。また、どのような特徴があるのかということを事前に実態把握することは、その後の保育を構成する際に大変重要である。

(4) 自立への意識

幼児期の積み重ねが人生の土台になるという、障害児保育の基本的な捉え方が伺える。障害児が自分の思いを周囲に伝える術を、大人が伝えていくことの重要性を保育者は語っている。そのため、パニックになって自分の思いを伝えることも、対象児の自己表現として大切だと言えると思われる。また、保育者は、園での経験が就学に大きな影響を与えるということ、実際に対象児の成長を目の当たりにするなどして強く自覚しているようである。

(5) 他児とのかかわりに関すること

日々の運動遊びの中で、他児から障害児に対する不満が噴出する場面は多い。特に、勝ち負けのある遊びや、ルールのある遊びでは、障害児のせいで負けてしまうという思いや、ルールを守って遊べない障害児に対する不満が多く生まれる傾向にある。保育者は、そのような他児からの不満を受け、障害児と健常児の両方の立場でかかわる必要があるため、板挟みになる場合もしばしばあるようである。

他児が対象児に対して不満に思うからといって、仲間はずれにするような様子はあまり見られない。これは、健常児が保育者の姿を見て障害児に対する理解を深めたり、かかわり方を学習したりしているからであると考えられる。

(6) 保護者に関すること

保護者とともに障害児を育てようとする保育者の思いを伺うことができた。保育に対する意見を一定保護者に求めたり、保護者の願いに沿って保育を進めたりしようとする保育者の姿が見られ、障害児保育において、保護者との関係を大切にしているのだということを知ることができた。

(7) 他の先生との協力・連携

子どもによっては、園外で運動遊びに取り組んでいる場合がある。平常のいつもと違う環境で運動に取り組むことは難しく、また、園外の先生も、対象児の特性を知らないためどうかかわればいいのかかわからず困惑する場合があるため、担任として必ず外部の先生と連携をとることが重要である。

クラスによっては、加配の先生がいる場合がある。障害児を保育する場合、個別にかかわることで解消される困難さもあるため、加配の先生が障害児と1対1でかかわることが大変重要になってくる。また、加配の先生と日々の保育の方針を積極的に共有したり、相談したりする保育者の姿が見られた。

4. まとめ

統合保育であるゆえに、健常児との関係を一定保つことや、ルールのある運動遊びに取り組むことの難しさを多くの保育者が感じているようである。保育者は、そのような困難さに対して、日々試行錯誤しながら、障害児が楽しんで運動遊びに取り組めるように、そして、就学やその先の人生につながっていくようにという長期的な視点をもって、運動遊びに取り組んでいるようである。障害児一人一人にはもちろん個性があり、障害の種類や程度も違えば特性も違う。障害児保育において、これという一つの確立された保育方法は存在しないが、本研究においてインタビューに協力していただいたどの保育者も、障害児一人ひとりを理解しようとする姿勢をもち、その子の成長や発達を願い、自立という大きな目標に向かって日々保育を進めていることが理解できた。保育者にとって障害児保育は不安も多く、自信をもって取り組むことは難しいとは思いますが、障害に寄り添いながら、健常児とともに豊かに育てていこうという姿勢をもつことこそが、障害児保育において一番大切であると考えられる。

文献

- ・伊勢田亮・小川英彦・倉田新『障害のある乳幼児の保育方法』 2008年。
- ・小川英彦『気になる子ども・発達障害幼児の保育を支える あそび55選』 2014年。